

アラシツ・シバサシ小論

著者	小野 重朗
雑誌名	沖縄文化研究
巻	1
ページ	164-184
発行年	1974-06-20
URL	http://hdl.handle.net/10114/00015488

アラシツ・シバサシ小論

小野 重朗

沖縄・奄美の島々にシツ・アラシツ・シバサシなどよぶ行事がみられ、これらは季節の祭事としては「正月」や「盆」よりもより古い形ではないかと思われる。シツとシバサシの行事を較べながら、古い「節」の儀礼構造を考えてみたい。

一 シツとシバサシの行事と伝承

沖縄・奄美圏でシツとシバサシの伝承のあるのは北から、喜界島、奄美大島と離島、徳之島、沖縄本島と離島、宮古諸島、八重山諸島である。またシツもシバサシもないが関連ある伝承が沖永良部島にみられる。それぞれの事例を要約して挙げておこう。紙数の都合で部落の事例としてでなく、島内などから抽出した事例を挙げることになった。出典もいちいち記さず、参考にした文献を後に挙げた。奄美について

は筆者の調査を主として用いた。

(1) 喜界島のシチオンメ・シバサシ・ナンカビ

シチオンメ（節折目）またシチ（節）は旧八月初の丁^{ヒント}の日で、赤飯をたき、その初を先祖に供え、親元に送る。シチアミ（節浴み）といってこの日の早朝、山の泉や井戸などで、七歳までなどの男女の子供に、スキの葉などにつけた水を頭から振りかける。その前に赤飯や米粒を子供の頭にのせる。初めてのシチアミをハツシチアミといって盛んに祝い、また十歳の子供にトメシチアミ（止節浴み）をすることもある。その泉の石や水を持ち帰り、石は蜜柑などの成り木の叉におき、水は根元にかけて「ナリヨー、ナリヨー」と豊作を祈る。また帰りに畑の石を拾って、スキの葉で俵状にした苞を作って入れ、高倉に掛けて、穀物の豊作を祈る。この日の夜明けに子供たちは近くの岡の上で東の空の雲の形をみて、タカタロウ（高太郎）などとともに楽しむ。この日、元は八月踊りをした。

シバサシ（柴差し）はシチオンメの後五日目、すなわち辛^{カト}の日に当たる。ハサームツチー（葉に包んだ粽風の団子）を作り先祖に供え、親に送る。これを貰って回るモチモレをする所もある。スキの葉を家の軒先、門、井戸、便所、それに家の傍の畑などに差す。桑の木の皮をはぎとって、子供の手足、牛馬など家畜の首、臼、杵などに一重まわして括る。これは悪魔祓いだという。夕方または墓参りから帰ると門口でワラやキビガラを燃やし、ムッチーの汁などをかけてその火を消す。これをウニヌヒサヤキ（鬼の足焼き）といい、先祖との今年中の縁切りだという。この夜はムンビイ（物の怪火）が出て人の死や凶事を予兆するといひ、青年たちが山に登ってそれを見張りする部落もあった。喜界島の東北部の諸部落ではこの日にウ

ヤンコー（先祖祭）をし墓地の前でにぎやかな宴を行なう。（西南部の部落のウヤンコーは旧九月以降の初の壬戌の日にコーソマツイをする）。

ナンカビー（七日日）はシチオンメから七日目、シバサシから三日目で癸ミズノトの日になる。軒や畑などに差したシバサシのススキを集めて葉先を曲げて結んだものを、門口のわきに竈の灰を置いて立て、カユの汁、米の汁などをかける。アスビミター（八月の遊びの果て）といつて八月踊りを踊り終る。中里部落ではトンニヤといつて子供たちが岩から海にとびこんで泳ぎ、下帯の海水を絞って岩のくぼみに満たすと豊年になるという。

(2) 奄美大島のアラシツ・ニャーダントイ・シバサシ

アラシツ（新節）は旧八月初の丙ヒンメの日である。ミシヤクという粳米で作った甘酒に似た飲物と、カシキという小豆の強飯を作る。それを貰いに家々を訪れるウバンモレ（御飯貰い）をする部落もある。北部大島の笠利町、竜郷村、名瀬市、大和村などの家々では先祖の位牌を下し、盆の時のように屏風で囲い、カシキ、ミシヤク、魚など供える。その時の箸は桑の枝の皮をはいだもの、供花も桑の柴である。大島南部の住用村、宇検村、瀬戸内町などはアラシツに先祖を祭ることはいない。アラシツは八月踊りを始める日以前晩は夜明しに踊る部落も多い。宇検村の部連など数部落ではシチグワー（節小）といつて旧七月の初丙にもアラセツと同様な行事をする。

ニャーダントイ（庭種取り）は大島北部の笠利町、竜郷村の諸部落でだけ行なっていたもので、アラセツの三日目、戌ツチノエの日に当たる。家の高倉の前庭を五十センチ四方ほど耕やし、ジコ（粳稻）やモチ稻、麦、大

根、豆などの種子をごく少々ずつ蒔いて水をやり、シャコ貝などの被いをしておき、その発芽をみる。よく発芽すれば、その作物は豊作になるという。シキユマの時に田から刈ってきて掛穂してある稲の粃をまくという例や、発芽した稲の苗を大切に残して、ソーリ（旧十一月一日の行事）の日に田の隅々に一本ずつ植えるという例もある。種をまいて一日遊ぶ。この日は必ず雨がふるとか、畑に大根をまく日だともいう。シバサシ（紫差し）は大島全体で、アラシツの七日目の壬ミズノエの日の行事で、シツ（節）とシバサシは七日（だて）隔めという意識が強い。大島全体でこの日はコスガナシ（祖霊、盆のセロガナシ・精霊に対応する言葉）を祀る日といい墓参し、縁側または座敷に供え物をする。ミシヤク、カシキを中心に、サトウキビ、蜜柑、魚を供える。箸は桑の枝、花はススキ、サトウキビの花。宇検村の阿室、平田などの数部落では本家にシバサシキモンという先祖の着た琉球系の式服を保存していて、それを縁側近くに並べて、それにそれぞれミシヤクを供え、団扇を置いてまつ。離島の請、与路では小さいワラ人形を玄関において、コスガナシを接待させる。シバサシの前晩または朝に、門口で火を燃やし煙を立てる。ワラの輪の上に、粃殻とヨメクサ、チカラグサなどというオヒシバの緑の草をおき、オキ火をのせてくすぶらせる。コスガナシは旅で死んだり、海で死んだ祖霊で、この火で体を温めるのだという。またこの火にニンニク、牛糞などを入れたり、この火をウツチュハギ（親の脛、仏の脛）を焼くとか、オニノヒサ（鬼の足）を焼くなどという。シバサシにはススキ（点々とシイノキの柴、桑の枝、ヨモギの茎などを添える例がある）を家、竈屋などの軒先に差し、アタリ畑（屋敷内の畑）の中にもさす。子供たちの首にはニンニクの玉を三つ五つ貫いた桑の皮の輪を結びつけ、手首、足首も桑の皮で結ぶ。魔除けと言い、死者と生者を見分けるためだと言ったりもする。シバサシに

も夜明しの八月踊りをしたり、ハーサムツチを貰って回る餅貰レをする部落もある。大和村の大棚など数部落ではこの日に洗骨改葬する習慣である（一般にはドンガ、トモチ、七夕などに改葬する）。

ナヌカビ（七日目）という言葉は一般には聞かないが、瀬戸内町西古見ではアラシツからシバサシまでの七日間をナヌカビといい、この間は種子をまくな、味噌をつくなと言う。この間に種子をまかぬという伝承は南大島で広く聞かれる。

(3) 徳之島のアラシツ・シバサシ

徳之島の南部の伊仙町と、徳之島町の一部との計十部落ほどにアラシツ、シバサシの伝承がみられるが、極めて微弱なものである。

アラシツは旧暦九月に入ってからヒントウの丁卯または丁酉ヒントウの日というのがほとんどで、白井部落では立冬から初の卯の日というそうである。シツの始まりとして飯をたいて先祖棚に供え、墓参りもする。この日バシヤギン（芭蕉衣）を木綿の単衣に着更えた。喜念部落ではアラシツの旧九月の初丁卯または丁酉の後、四日目にやってくるカノエウマ庚午またはカノエネ庚子カノエネの日にホンネオロシ（本種下し）といって稲種をまき、その日に餅を作り、部落の男女が餅貰レをして回る。

シバサシはアラシツから七日目の酉の日という。家の軒の四隅にススキを差して魔除けにする。菖蒲を差す白井部落の例のようなものもある。喜念部落のようにアラシツだけでシバサシを欠く例もある。

(4) 沖永良部島のナンカビ

沖永良部にはアラシツ、シバサシの伝承は聞かれないが、ナンカビというがあるので略記しておこう。

ナンカビ(七日目)はトウルミ(洞穴風葬墓参り)から七日目にくる。旧暦九月になって初めての庚寅の日がトウルミで洞穴墓の口を開いて墓参し、改葬もこのときにする。この日から翌日にかけて、ウヤフジマツリ(祖霊祭)といって縁側近く外に向けて、飯、汁、サトウキビなどを供えてウヤフジを祀る。それから七日目の丙申ヒノエサルの日がナンカビで、この日も供え物をしてウヤフジを祀る。七日間続けて毎日食物を供え続ける例も多い。ナンカビには元は村踊りが盛んであった。さらにナンカビから三日目をドンガといい、これでウヤフジ祭を終る。

(5) 沖縄本島のシバサシ・ヨーカビー

シバサシ(柴差し)、ヨーカビー(妖怪火などの字を当てるが、八日目の意か)は旧暦八月の八日から十一日頃の間に相前後してくる。部落によりシバサシが先にくるというもの、ヨーカビーが先にくるというもの、日も変化が多いが、九、十、十一日に二日引き続いてくる例が多いようである。ヨーカビーが八月八日である例も勝連村浜比嘉島、読谷村座喜味など点々とある。

シバサシにはカシチー(小豆の強飯)をたき先祖に供え、グシチ(ススキ)を門や屋敷の隅々、庭木の根、水甕、臼、杵、穀物などに差し、また臼と杵を門口におく例もある。ススキにシイノキやヤブニツケイの枝を添える例もある。魔物を追うといって鳴り物をならして騒いだりする。ヨーカビーには妖怪の出現を見るといって青年たちは木の上や小高い所に登って部落の方を見張りした。火の玉があがった家には死人があるなどの不幸があると言われ、その家に知らせて抜いをした。

(6) 宮古島のシツ・ミヤークツツ

宮古島とその離島の諸部落では旧五、六月にシツという行事がある。また離島の池間島では旧八月、九月にミヤークヅツという行事があり、これには宮古月、宮古節などの字を当て、節の行事と言えるか否か問題であるが、一応説明しておく。

シツ（節）は旧暦五月から六月の甲午ヤノエウマの日で、この朝早くウブカー（産井）の水を汲んで子供に浴びせる。これをシツミヅ（節水）、スディミヅ（新生、若返りの水）といい、人々は身をすすぎ、湯茶にわかし先祖にも供え、家の柱や壁にも注ぐ。浜下りをして、海辺の小石を拾ったり、岩を欠いで持ち帰り、大世の俵だといって穀物の俵の上に置いたり、家の桁の上や、庭の生り木の叉の上にのせておく。島尻、狩俣部落では子供たちが集まって家々を訪れ、庭で粟殻を丸めたものを燃やし、その火をめぐって、粟の豊作を祈る歌をうたい踊り、粟と米の大きな握り飯をもらった。水納島、多良間島ではシツウプナカという部落単位の盛んな祭りがあり、豊年祭りだという。九月の頃にあるフユウプナカに較べてはるかに盛大だという。ミヤークヅツ（宮古節、宮古月）は池間島だけで見られる行事で、旧暦八月から九月の甲午ヤノエウマから三日続く祭りで、クイチャーという踊りが踊られる。この日は特定の井戸からスディミヅを汲んで身を清める風習がある。

(7) 八重山のシチ

八重山の石垣島、西表島とその離島にはシチの行事がある。

シチ（節）は八月から九月の頃であるが、日はいろいろ変異がある。西表島は多くは八月から九月にかけての癸亥ミズノイの日といい、石垣島川平では戌戌ツチノエイスの日という。西表島の租納の場合は癸亥の日がシチ（節）で

トウシヌユー（年の夜）ともいい、家を清掃しシツマキグサ（節巻草でカニクサという蔓草）を山からとってきて家の中柱や主な柱、水甕などの家具、農機具、庭の木々などを縛る。また海から小石をもってきて家の内外にまく。翌、甲子^{キノエネ}の早朝に娘たちはそれぞれきまった井戸でスデイミヅ（産水）を汲み、身をそそぎ、飯をたいて神前に供える。この日をユークイ（世乞い）といい、女の人たちがシツアンガマ踊りを踊り、男たちはシツフニ（節船）の競漕をする。この船で五穀の豊年の世が運ばれてくるという。その翌日がトドメ（止め）で、この三日で節祭が終る。石垣島の川平では戊戌の初日はシツマヤムカイといって蓑笠をつけ長い杖をもったマユンガナシ（真世の神、豊作の神）が家々を訪れ、祝福のカンフツ（神口）をのべて回る。二日目^ニが年の夜、三日目にスデイミヅを汲み、四日目はユークイ、五日目はニライタウフヤーン（ニライ大親神）送りと続く行事になっている。

二 シツとシバサシの構造と意味

ここに見てきた沖縄・奄美圏のシツとシバサシの配置を抜き出して略記してみよう。奄美にはシバサシの後にドンガ、トモチなどの後へ後へと引き続く行事がある。この文では取り扱わないが、表には記しておく。

これら前後に相並んだ行事は、たまたまこの時点に並んでいるのではなくて、有機的に関連していることは、前の行事の後の何日目に行なうかとか、前の行事後の何の日に行なうなどと厳密に伝承しているこ

喜界島	シチオンメ	シバサシ	ナンカビー	ドンガ
奄美大島北部	アラシツ (ニャーダントイ)	シバサシ		ドンガ
奄美大島南部	アラシツ	シバサシ		ドンガ
徳之島	アラシツ (ホンネオロシ)	シバサシ		ドンガ トモチ
沖永良部島	(オヤフジマツリ)		ナンカビー	ドンガ
沖繩本島		シバサシ	ヨーカビー	
宮古諸島	シツ			
八重山諸島	シチ			

とからも明らかである。例えば奄美大島北部の笠利町の諸部落では旧暦八月の初の丙の日にアラシツがあり、中一日において三日目にニャーダントイを行ない、アラシツから七日目にシバサシを行なう。ドンガはシバサシの後にくる甲子の日に行なう。ドンガの場合は干支の都合で何日目と言わない(シバサシから最少九日目、最大五十九日目など変化があるので)が、アラシツとシバサシの間は七日隔めであるという意識が強い。シバサシと同質の行事を喜界島、沖永良部島、沖繩本島などで、ナンカビー、ヨーカビーなどというのはシツから七日目の日、八日目の日ということが行事の名称になったものと思われる。ということはシツとシバサシは相関連した行事であることを示していよう。

喜界、奄美大島、徳之島ではシツとシバサシとさらにドンガとが連鎖していて、この三つをミハチガツ(八月の三つの行事)という意識をもって行なっているが、ドンガを除いて、シツとシバサシについてみても、沖繩本島ではシツ行事が全く欠けており、宮古、八重山ではシバサシの方が欠けている。沖永良部島

ではシツという名称が欠けている。これはどう考えればよいだろうか。

私は民俗変遷について、「民俗変遷の仮説」というのを思いついて用いているが、これは民俗が変遷して新しい要素を加えるときにはその後へ、後へと付け加えて行く、したがって民俗行事の後の部分は、歴史的に後に加わった部分であるという考え方である。試みにこの仮説で、シツとシバサシの関係を説明してみれば、先ずシツの行事があり、後にシバサシの行事が始まって、シツの後に加わり、さらにドンガの行事が始まって後に加わったと考えられるのである。この見方に立って、シツ・シバサシ行事圏を見ると、宮古・八重山の、シツだけでシバサシを欠く形は、シツだけあってまだシバサシの発生のない、最も古い姿を留めているものと思われる。それに対してシツ、シバサシ、ドンガと三つの連鎖した行事をもつ喜界島、奄美大島、徳之島の形はシツが次々と派生行事を生んだ最も盛んな頃の姿を見せておられると思われる。また沖縄本島でみられ、沖永良部でもやや見られる、シツの欠除したシバサシだけの形は、シツとシバサシの連続した形から古い部分であるシツが消失して、新しいシバサシだけが残ったもので、いわば最も後次的な形と思われる。沖縄・奄美文化圏で文化の進展の最も早いのが沖縄本島であり、奄美の島々や先島には文化の伝播もおそく、古い形が残留することを思えば、このような変遷として把えることも不自然ではないとも言えよう。

ここで、シツとシバサシが具体的にどのような構造と機能をもっているか、互いにどのようにに関連しているかを見ていこう。

先ず、アラシツから考えよう。シツ、アラシツの行事として最も顕著なのはこの日の朝にシツミヅ、ス

ディミヅなどとよばれる水を浴びるシチアミが行なわれることである。これが喜界島と宮古、八重山に行なわれているのは外圈に古形を留めているのであろうか。宮古、八重山ではほとんど正月の若水と同じような簡単な行事になっているが、スディミヅの若返らせる能力についての有名な伝説もあり、水納島のシツには子供をチカラシバという草の上に立たせてシツミヅを頭から浴びせるというのは、喜界島のシチアミが七歳以下の子供に行なわれるのと同様な行事である。スディミヅについては若返らせる能力が強調されるが、スデルという言葉には若返るという意味と共に、生まれる、育つの意味がある。力弱い子供たちにシツミヅの霊力をつけて力強くし成長させようとするのであろう。このような霊力をもっているのは節水に限らず、石、穀物、草などもあったらしい。喜界では泉や畑から小石をとって来、宮古では海辺の小石を拾ったり岩をうちかいでもち帰り、それを高倉や家の桁の上にのせたり、果樹の叉の上に置いたり、俵形に包んで穀物の俵の上にのせる。喜界では節浴みする子供の頭に米粒や赤飯の粒を置く。八重山ではシツマキグサという蔓草（ノロなど神女たちが冠にする草）を柱や家具、果樹などに巻く。これらはスディミヅと同じく、石や穀物や霊力のある草などの力を子供や人ばかりでなく家、家具、成り木にまで付けようとする呪術にちがいない。これらの儀式が子供の誕生のときにウブミヅ（産水）を浴びせ、石や穀物や蟹を頭に置く、沖縄・奄美圏の生誕儀礼と全く類似しているのは注目せねばならない。人生の初めに、また季節の初めに生命力の弱いものに生きる力を付与するという点で共通しているのであろう。

節に当たって人々に水や石よりもさらに強い生命力を与えてくれるのは来訪神である。八重山の石垣島北部では蓑笠をつけ長い杖を持ったマユンガナシが真世を約束しに訪れる。同じく八重山の西表島の租納

などでシツフニ（節船）の競漕も来訪神の乗る船であったと考えられるかも知れない。また喜界島で子供たちが夜明けに丘に上って東の空の雲をみて、タカタロウとよぶのも、節の来訪神の姿をみているのかも知れない。

ここにかすかに残っているシツの来訪神を単純に祖霊、祖神なりときめるのは不適當のように思う。シツの行事の中に先祖を祀るとする例は相当にある。シツの食物であるカシキとかカシチーという小豆入りの強飯を先祖に供える例は多いし、奄美大島北部の笠利町、竜郷村、大和村などではシツに先祖棚から位牌を下し、屏風で囲って供え物をする。また沖永良部島ではシツに相当すると思われる日に洞穴墓を開いて墓参し、ウヤフジマツリといって縁側近くに祖霊を祀る。しかし最も古形を持つと思える宮古、八重山のシツには祖霊祭としての要素は全くみられないし、奄美圈の中で古形を留めていると思われる奄美大島南部の宇検村、瀬戸内町ではアラシツには祖霊祭はなく、シバサンが祖霊祭の濃い要素をもっている。家の中に先祖を祀る常設の先祖棚ができればシツのカシキやミシヤクを先ず先祖へ供えようとするのも当然のこと、これをもってシツを祖霊祭と考えることは無理であろう。

スデイミヅを浴び、石や穀物や草の霊力を身につけ、来訪神の祝福を受けるシツとは何であろうか。シツの語が節であり、節分や節変りと同じ意味であることは従来言われている通りであろうが、このシツはどんな季節と季節との節変りなのであろうか。シツの期日を見るとその変異が多いのに驚かれる。奄美大島では旧八月の初丙の日、喜界島では初丁の日で共に八月の十日の内にくる。八重山諸島では八月に入って以降の初めての癸亥とか戊戌の日といい、徳之島では九月に入って初の丁卯または丁酉という。これ

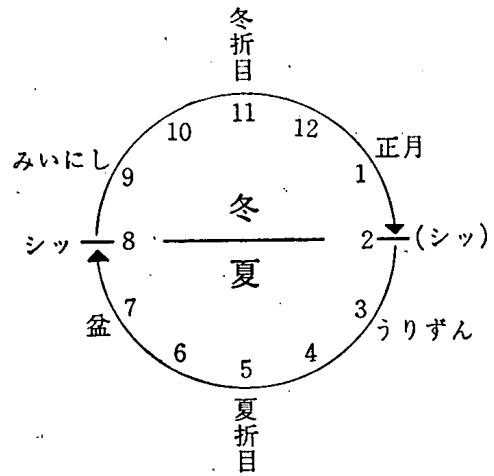
らの干支の日は八月一日にくる年もあると共に九月の末になることもあり、二ヶ月の偏差があることになる。これらの干支にはどのような意味があるのかも解らない。ただ八重山の西表島などで癸亥の日がトゥシヌユー（年の夜）で翌、甲子の朝にスデイミツを汲むというのは、これが干支の最終と最初の日に当たっていることは何か意味がありそうにも思える。このような変異の多い中で徳之島の九月を除いて共通することは八月一日を基準にして日を決めていることである。沖縄本島は干支によらない唯一の地帯だが、ここにはシツは消失していて、シバサシ、ヨーカビーが八月八日から十一日あたりにくる。このヨーカビー（八日日）から消失したシツの日を逆算すれば八月一日から三日あたりということになり、これも八月一日を基準にしている。

この八月は南島で稲の収穫が終り、次の稲の播種の行なわれる前という区切りの月であることは言うまでもないが、もっと基本的にみて八月が季節の移り目という感じ方があったもののように思う。奄美一帯でアラシツからシバサシにかけて踊られる八月踊りの中で最もよく歌われる歌詞に次のようなものがある。

可^{あた}惜八月を、み冬^{しふゆ}なす辛^{しん}気

愛^{かな}人が年、吾^わ年、寄^からす辛^{しん}気

そのままに解すれば「惜しいこの八月を冬にするのは辛い、そして八月になってお前の年、私の年が寄るのが辛い」ということであろう。つまり八月のシツを境にして冬になり、年をとると考えていたことになる。沖縄の古歌謡には夏と冬はでてくるが、春と秋は全く姿を見せない。現在でも沖縄・奄美圏には春と秋の季感はない。春に近いウリヅン、秋に近い新北^{しほ}風^{ふう}のもつ季感も、ウリヅンは初夏、新北風は初冬と



しての季感になっている。五月の頃に夏折目^{ナツウツミ}、十一月の頃に冬折目^{フユウツミ}という祭りはあるが春祭、秋祭はない。一年を四つの季節に分けて、立春、立夏、立秋、立冬を節分とするのとは違って、一年を夏と冬に分けてその区切りを節としたのがこの八月のシツではあるまいか。春秋の季節感の強いわれわれには異常に思えるけれども、八月に入った頃に夏が終り、冬になり、人は一つ年をとり、それゆえにスデイミヅを浴びねばならなかったのではあるまいか。

夏から冬へのシツが八月のシツだとするなら、冬から夏へのシツもあつたはずである。それを私は正月であろうと思う。夏冬二季感は南島に限らず、古く日本列島に広く見られたものではあるまいか。そして八月の頃に夏から冬への節、二月の頃に冬から夏への節があつただろうと思う。九州では八朔から十五夜にかけて引き続いた盛んな行事群がみられ、七月の盆よりも重要なものだったことを思わせる。また冬から夏への節として私は例えば本土の二月祭や奄美の二月のウムケ（迎祭）などを考えている。後に春、秋の季感が強くなり、八月の節は立秋に近い七月の盆へ、二月の節は立春に近い正月へ移行したのではあるまいか。沖縄・奄美圏では冬から夏への節は強い本土文化の影響をうけ正月に移行したが、夏から冬への節は稲作の生産暦とも関係しつつ古い八月のシツとして留まったものだろう。沖縄本島でシバサシが残りシツが消失したのは、後に本土から入った盆の影響もあると思う。このような説明では理解し尽せない事も多い。そのうち最大のものは、宮古諸島のシツが旧五月以降の

初の甲午の日に行なわれることである。宮古には稲作はほとんど行なわれず、このシツは主作物の粟の収穫後にくるのだが、このシツを粟の生産暦だけから見るべきものかどうか。宮古は沖縄・奄美圏の中でよく古い民俗を留めている地帯だけに、ここに大きな問題が残ることになる。

シツの日の数日後に稲などの播種の儀礼が見られることは重要である。大島本島北部の笠利町、竜郷村の諸部落ではアラシツの翌々日をニヤードントイ（庭種子取り）といって庭先を少し耕して、稲をはじめ麦、大根、豆などの種を少しずつ蒔き、その発芽をみる。よく発芽すればその作物が豊作になるという年占的な意識もある。大根の種子をまくことを強調するし、有良部落ではシキユマに掛け穂した稲の実をまくといい、屋仁ではニヤードントイに発芽した稲苗をソーリという田植儀礼の日に田の四隅に植えるという。シキユマ→ニヤードントイ→ソーリと引き続く稲作儀礼があったことも考えられる。『琉球国由来記』に多くみられる宮種という種下しの前にくる儀礼も、このニヤードントイのことかと思われ、この伝承は奄美大島北部だけのものではなかったらしい。さらに大根の種、麦の種も植えるというのは、稲作儀礼に限らない広い農耕儀礼であったと思われる。シツの二、三日後にニヤードントイという農耕儀礼があることは、正月の二日―四日頃に鋤入レ、田打ちなどの農耕儀礼があることと類比される。これはシツの祭をすまずと、先ず何を置いてもこの季節の農作の事を考え、そのための農作始めや豊作を祈り占う儀礼をしようとしたのである。農耕儀礼は本来の節の儀礼ではない。いわば後次的に付け加わったものだから、シツの日には行なわないで、三日目に遅れて行なうのである。シツの行事の拡大ではあっても、シツとは同化できないで、ニヤードントイという別の名をもっているであろう。

徳之島のアラシツは九月になってからの丁卯の日というものが多く、喜念部落ではこのアラシツから四日目の庚午の日にホンネオロシ（本種下し）といって実際の稲の種蒔きをするという。これなどは稲の種下しのほうにアラシツのほう引きよせられた異常形であるかも知れない。

さて次にシバサシ（柴差し）について考えよう。シバサシに祖霊を祀るとする伝承は広く見られ、特に奄美では顕著である。奄美大島南部の宇検村の一带では部落の本家筋でシバサシキモン、コスガナシキモンといって祖先の着たという古い着物を何枚も保存しており、シバサシには縁側に近い座敷にそれを並べ、ミシヤクやカシキを供えて、内から外に向かって拝む。この例でも見られるように、シバサシの祖霊（コスガナシ）は家の中深く入って祀られることはなく縁側あたりで外向きに祀られる。その点、盆の祖霊（セロガナシ・精霊）が座敷の中の精霊棚で祀られるのとはやや待遇がちがう。

シバサシにコスガナシを迎え送るといって火を焚く例が多いが、これも盆の迎え火、送り火とはだいぶ相違する。門口にワラの輪を台にして、モミガラをオキ火でくすぶらせるが、その時にチカラシバを添える。チカラシバは先にみたように霊力のある草でここまでは異常ではないが、コスガナシは海の方から来るので体が冷えていて火が温かいと喜ぶと言うと同時に、この火は「仏の足^{ヒサ}焼き」だとか「鬼の足^{ヒサ}焼き」だなどと言い、火の中にニンニクや馬糞をくべて悪臭を立てる。コスガナシを迎えつつ、他方では追い払おうとすると思えない。

コスガナシは海で死んだり、旅で変死した人の霊だとも言われる。ところが奄美・沖縄ではこの海で死んだり、旅でなくなった人の霊は死霊の中でも最も祟りの強いものとして恐れられる。シバサシにはこう

したコスガナシを含めて諸々の悪霊的なものを防ぎ避けようとする要素が多い。シバサシという名の元になったススキを家の軒の四隅をはじめ、いろいろの建物や井戸など、屋敷内にある園畑の真中などに差す。刃物に似たススキの葉の力で死霊や悪霊を家の中や畑の中に入れまいとするのである。桑の皮にニンニク玉を貫いて、子供たちの首や手首、足首にまわし、馬などの家畜の首にかけ、白や水甕にも結びつける。桑やニンニクが魔除けの霊力をもつことはよく知られている通りである。

喜界島ではシバサシの夜に青年たちが山の上からムンビイ（怪火）を見張って人の死や凶事の予兆を知ろうとし、沖縄本島ではヨーカビーに同じように部落の家々から異変の前兆としてあがる青や赤の火の玉を監視する。どうやらシバサシ、ナンカビー、ヨーカビーはコスガナシを含めて悪霊の群がる日のようなものである。

ここに注目されるのはシツとシバサシの儀礼的行事に類似が見られることである。例えばシツの朝に喜界島の子供は小高い岡に登って東の空に立つ雲を見て高太郎など吉きものの姿を見るのに対して、シバサシの夜に喜界や沖縄では青年たちが岡の上から部落に立つムンビイを見る。これらは共に山上で遠くおぼろげな聖なる姿を見ようとする点で同じだが、シツのほうは明るい吉兆を見、シバサシの方は暗い凶兆を見る点では正反対になっている。また西表島ではトウシヌユーにシチマキグサで家の柱や家具、農機具や庭木など縛るのに対して、喜界や奄美大島ではシバサシに桑の皮で子供の首、手足、家畜の首、白や杵を縛る。これらは共に植物のもつ霊力を付け添える呪術であるという点で同じだが、シツのほうはその霊力を内なるものに付与するためであるが、シバサシのほうはその霊力で外なる悪霊を払い除けるためのもの

となっている。この類似と相違はどうしておこったのであろうか。これはつまり、シバサシはシツを模倣して行なわれながら、シツとシバサシでは祭られる神、祭る者の心意に大きな違いがあるためであろう。

季節の変り目のシツには八重山のマユンガナシのような季節の来訪神を迎えて、カシキ、ミシヤクを作り、八月踊りや節アングマなどとよぶ踊りをおどって賑やかな祭をする。この賑やかな祭を羨やみ、自分たちもシツに招待しると、正客ではない諸々の神々が集まってくる。その中心になるのがコスガナシといわれる祟り易い祖霊である。穀殻の火で足を焼くという鬼も集まってくるし、沖縄の喜如嘉あたりではブナガヤという山の木にすむ怪物も現われるという。これら恐ろしくもあり、一面では懐かしくもある正客ならぬ神々（精霊などを含む）のためにシツの日が穢されないように、日を改めて祀るのがシバサシである。だからシバサシにはシツと同じように、カシキ、ミシヤクを作り、八月踊りをして接待しながら、なおこの神々が家の中まで入らないように、大切な大根畑にも入らないようにススキを立て、生命力の弱い子供や家畜などには桑の皮の魔除けをつける。そして馬糞やニンニクをくすぶらせたり、爆竹を鳴らして早々に送り帰してしまおうとするのである。

これは突飛な思い付きのように思えるかも知れないが、本土の正月、薩南のトカラ列島にみられる七島正月などでも、このシツとシバサシに極めて似た儀礼構造をしている。ここでは正月だけを見てみれば、大晦日から元旦にかけて、甌島などでみられるような年神の来訪があり、若水を汲むのはシツと全く同様であり、それから七日目の六日年、七日正月には棘のあるタラやモロムキ（和名イヌカヤ）を門口や家のまわりに立て、鬼火を焚いて鬼の目を射るとか鬼の足を焼くといい、鬼を追うといって竹を爆かせたり、空

砲を打つ。六日年は仏様に重きを置き、祖先をまつる年取りだとする例も多く、これらはシバサシと全く同様である。これは正月やシツの後に、死霊や祖霊を含めた恐ろしい神々を祀るため、七日程おくらせて六日年、七日正月、シバサシがあるのだと考えるほか、妥当な理解はあり得ないもののように思う。

七日ほど遅らせることにも意味があるに違いない。奄美ではシツとシバサシは七日隔めだと強く意識されているし、喜界島ではシバサシの終りの行事がシチオンメから七日目のナンカビーに当たる。徳之島でもシバサシはアラシツの七日目といい、沖永良部島のナンカビもシバサシに相当する。沖繩のヨーカビーはシバサシと重なっており、八月のはじめにあったらうシツから八日目の意と思われる。すなわちシバサシとナンカビー、ヨーカビーは、同義の異名でこの祭のシバを差すことと、シツから七日目、八日目に行なうことの印象が強いことによる名称であろう。だから、シツから七日目、八日目であることは重要な意味があつたに違いない。

一般に悪霊、災厄神、死霊など恐ろしい神を祀る日は、六、七、八の日が多い。正月の六日年、七日正月、シバサシ以外にも、本州に広く分布するコトは厄神を除けるといいコト八日といって旧二月、十二月の八日に行なう。沖繩の本島から先島にかけて分布するシマクサラシは魔除け悪病除けといい、旧二月、十月、十二月の八日に行なうものが多い。沖繩本島のムーチー（鬼餅）も旧十二月八日である。薩南のトカラ列島には七島正月に続いて十二月六日、七日に祖霊を祀るオヤダマ祭、その後の十六、十七日には恐ろしい神々をまつるヒチゲーがくる。

詳しい説明は紙数の関係で省くが、節の神や農耕の神など言わば正常の神を祀るのは一、二、三、四日

など五日までの日にし、祟り易い祖霊とか、いろいろの厄神を祀るのは六、七、八日など六日以後の日にするという原則のようなものがあつたかと思う。神々の性格によって日を違えて祀らねばならぬという「日違いの原理」とでも言えばよいかも知れない。このためにシバサシはシツの後、三日目、四日目などには行なわず、七日目、八日目を待って行なうのであらう。

終りに要約しておこう。シツは夏から冬への季節の変わり目に、マユンガナシのような節の神の祝福をうけ、スディミツなどの霊力を身につけ、新しい生活に入る祭であつた。農耕ことに稲作が盛んになるとこの節を機会に農耕儀礼を行なうようになり、ニャーザントイのような儀礼が正常神祭の日である三日目などに加わってきた。また節祭の賑わいを羨み、接待にあずかろうとコスガナシという死霊の影濃い祖霊などが集まってくるのを、シツから七日、八日目にシバを差したり、子供などの首に魔除けの桑の紐を結んだりして警戒しながら祀り、追いつくようにして帰ってもらうのがシバサシである。（さらにその後、風葬洞穴墓の中に屍が残っている、死穢の最も強い死霊をまつるドンガが続く。）この節儀礼——農耕儀礼——祖霊儀礼という三重構造は正月でも全く同じ形がみられ、これは元来はじめの節だけの儀礼であつたものが、後にだんだんと別の要素をつけ加え、後へ後へと伸びてこの重層構造になつたもので、節儀礼の特徴となつていえると言えらる。

あとがき——宮城真治氏の「古代沖縄の正月は陰暦八月であつた」が書かれてからもう四十年を過ぎる。この先駆的な論文から一步でも半歩でも進みたいと願つて書いたのだが果たせたかどうか。事例の詳細なものをつけ、ドンガ、トモチにまで言及した「シツの構造」といった文を書きたいと思つてゐる。

(参考文献)

- 岩倉市郎『喜界島年中行事』
増田勝機「喜界島の民俗行事資料」(『南日本文化』6号)
昇曙夢『大奄美史』
北見俊夫「奄美年中行事」(『日本民俗学大系』一二)
鹿児島民俗学会『加計呂麻島の民俗』
赤崎盛林「徳之島の年中行事」(『徳之島民俗誌』)
下野敏見「徳之島の年中行事」(『南日本文化』3号)
柏常秋『沖永良部民俗誌』
下野敏見「沖永良部島の民俗行事」(『南日本文化』5号)
比嘉春潮「沖繩年中行事」(『日本民俗学大系』一二)
琉球政府文化財保護委員会『沖繩の民俗資料』第一集
源武雄『日本の民俗 沖繩』
琉球大学民俗研究クラブ『沖繩民俗』1―19
伊藤幹治『稲作儀礼の類型的研究』
植松明石「沖繩伊是名島の年中祭祀」(『沖繩文化』六)
鎌田久子「水納島の年中行事」(『日本民俗学会報』二四)
比嘉盛章「西表の節祭とアンガマ踊」(『南島』一)
拙稿「正月の構造」(『日本民俗学』七八)